

見えないひと手間に感謝

鹿児島県 南九州市立勝目小学校 六年

扶川 瑛心

「おいしい。」

周りからこの声が聞こえてきたとき、ぼくは心の中でニヤツとした。

六年生の夏休みはクラスみんなでキャンプに行った。みんなで作った夕飯のカレーもおいしかったし、きもだめしも楽しかったし、夜中の三時まで起きていたのもドキドキした。修学旅行のときのように楽しかった。そして、ぼくにとつて、何より特別だったのは、二日目の朝食の味そ汁だった。ぼくの父が作った味そ汁だ。

父は、調理師をしている。料理をするプロだ。キャンプの日に父が作ってくれたのは、本当にこだわりのある味そ汁だった。あげと、わかめと、ねぎの入った味そ汁を作ってくれた。具材は、何も特別なものは入っていないのに、みんなが口々に「おいしい。」

と言いつつ、次々におかわりしたのは、父の見えない「こだわり」があったからだ。それは朝早くから起きて、自分でかつお

をけずり、だしをとった味そ汁だったのだ。ぼくから言えば、見えない部分に手間をかけた味そ汁だ。きつと、この手間をかけるなくても、食べることが出来る味そ汁はできると思う。しかし、ぼくたちのために、見えないひと手間をかけてくれた。ぼくは、みんなが、おかわりをするすがたを見て、本当にうれしくて、父をほこりに思えた。

走りの得意な父は、ぼくに走ることを教えてくれる。勉強も教えてくれる。ぼくができるようになりたいと思うことを、見えない部分で支えてくれる。ぼくが大きくなるときに、父や母が見えない部分で支えてくれ、いろんなことができるようにしてくれているのも分かっている。最近、イラッとして父や母にぶつかることも増えた。めんと向かって、伝えるのははずかしいけれど、味そ汁を作ってくれたことも、いつも見えない部分でぼくを見守ってくれたり、ささえてくれたりしている両親に、ここでありがとうを言おう。

お父さん、お母さん、いつも、ありがとう。